

令和元(2019)年度水稻生育診断予測事業速報 No. 1

(早植栽培 5月24日調査結果)

令和元(2019)年5月28日

栃木県農政部経営技術課

茎数は少ない。夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温の上昇を図り、分けつ発生を促進する。有効茎が確保されたら早めに間断かん水に入る。（平年は6月第2半旬）

1 気象概況<<4月上旬～5月中旬（宇都宮）>>

平均気温は、4月はほぼ平年並に経過し、5月上旬が平年を0.9℃、中旬が1.9℃高く経過した。日照時間は5月上旬は平年比148%、5月中旬は109%と多照であった。降水量は4月上中旬は平年を下回り、4月下旬は平年比183%と多かった。しかし、冬期の降水量が少なかったことや4月上中旬も平年を下回ったことが影響し、水不足による代かき作業の遅れがあり、移植作業も平年より遅れた。

2 調査結果<<早植栽培、品種：コシヒカリ>>

(1) 16か所平均（表1-1～2）

ア 苗調査

苗草丈は高く（平年比106%）、乾物重は重く（平年比110%）、葉齢は平年並からやや進み（+0.1葉）、平年並の苗となった。

イ 本田における生育調査

草丈はやや高く（平年比103%）、茎数は少ない（88%）。葉齢は平年並（-0.1葉）。葉色は平年より淡く（-0.4）、生育診断値（葉色×茎数）は平年より小さい（80%）。

(2) 分施肥体系の生育（9か所）（表1-1～2、2-1～2）

ア 草丈は26.9cmで平年比109%と高く、茎数は125.1本/m²で平年比89%と少ない。

イ 葉齢は5.4葉で平年より0.1葉多く、葉色は3.8で平年より0.4淡い。

ウ 葉色×茎数値は481で平年比81%と小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが17.5%（平年45.9%）、主茎第3節分けつは10.0%（平年28.7%）で、主茎第2・3節ともに分けつ発生率は平年よりも低い【農業試験場調査】。

(3) 全量基肥体系の生育（7か所）（表1-1~2、2-1~2）

ア 草丈は25.7 cmで平年比97%とやや低く、茎数は104.4本/m²で平年比86%と少ない。

イ 葉齢は5.2葉で平年より0.4葉少なく、葉色は3.7で平年より0.4淡い。

ウ 葉色×茎数値は393で平年比79%とかなり小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが20.0%（平年25.9%）、主茎第3節分けつは2.5%（平年30.4%）で、主茎第2節の分けつの発生率はやや低い程度だが、主茎第3節の分けつ発生率は平年よりかなり少ない【農業試験場調査】。

3 技術対策

4月から5月にかけて、日照時間は総じて多かったものの、4月下旬は平年比68%と少なかった。4月第5半旬の平均気温は平年比3.8℃高く、第6半旬は-2.8℃低くなり、5月第1半旬は2.1℃高く経過し、育苗期間の中後期は寒暖の差大きかったが、平年並の苗となった。

移植後、平均気温は5月第3半旬は平年比1.1℃、第4半旬は2.2℃高く日照時間も平年並に経過した。しかし、分施肥体系及び全量基肥体系ともに分けつは少ない。農業試験場の分けつの発生率調査においても主茎第2節及び第3節ともに少なく経過した。今後、気温の上昇に伴い分けつが旺盛になるものと見込まれる。生育は平年並からやや遅れていると推定される。

気象庁地球環境・海洋部発表（令和元(2019)年5月23日）の「関東甲信地方1か月予報」（5月25日～6月24日の天候見通し）では“気温は高く、降水量は平年並または少ない、日照時間は平年並または多い”と予想されている。今後、葉色×茎数値を適正範囲に維持するために、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

目標とする茎数（穂数）360～380本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数30千～32千粒/10a）を確保するまでは、夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温の上昇を図り、分けつ発生を促進する。

平年の間断かん水開始時期は6月第2半旬である。ほ場を観察し、目標茎数が確保でき次第、間断かん水に入る。

白未熟粒の発生を防止するとともに、登熟度を高めて良質米を生産するためには、適正粒数を確保することが重要である。初期の茎数が多く、過繁茂気味の生育になると粒数過剰となり、食味、品質の低下を招くおそれがある。適正粒数確保には間断かん水に入る時期が重要となるので、遅れないようにする。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

「令和元(2019)年度 病害虫発生予報第2号」(令和元(2019)年5月16日農業環境指導センター発表)で、イネ縞葉枯病の発生量はやや多いと予想している。根拠として、再生稲調査での本病発生株率、ウンカ類の越冬前幼虫の発生量はともに平年並で、ウイルス保毒虫率は、県平均が6.1%で10%を超える地点も確認されているためである。今後の気温も高いことが予想されることから、本病の発生拡大を防ぐため、地域ぐるみでのヒメトビウンカ防除(発生の多い地域では、箱施用剤の使用+本田での薬剤散布)を実施する。

イ イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ

イネミズゾウムシの発生が目立つほ場(移植後2週間の水田における成虫密度が株当たり0.5頭以上が要防除水準)では、有効な薬剤により防除を行う。

多雨で湿度の高い日が続くとイネドロオイムシの幼虫発生期間が長引き、多発生になりやすいことから、今後の天候と発生状況に十分注意する。

ウ いもち病(葉いもち)

取り置き苗は、いもち病の発生源となるため、早めに処分する。

(3) 雑草防除

中期除草剤の散布は、ラベルを十分確認し、使用時期に注意して散布する。

なお、MCPB等を含む除草剤は低温、シメトリンを含む除草剤は高温で薬害が発生しやすいので注意する。

除草剤散布時の水管理は、散布直前に水深4~5cmとし、散布後7日間は落水や、かけ流しをしないよう注意する。

※ 薬剤(登録農薬)はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>)

4~6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。



高齢農業者の事故が多発しています!以下のことを心がけましょう。

- ・複数人での作業に心がけ、一人で作業を行う場合は携帯電話を所持する
- ・こまめな休憩と、余裕を持った作業を行う
- ・家族や仲間から、作業中への「声かけ」(注意喚起)をする